

『就実論叢』第48号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2019年2月28日 発行

英語教師と研修

English Teacher and Research

田 淵 博 文

英語教師と研修

English Teacher and Research

田 淵 博 文 (実践英語学科)

TABUCHI Hirofumi

キーワード：イギリス、ことば、文化

平成30年8月27日から9月3日にかけてイギリス (England と Wales) を訪れた。6泊8日の旅であったが、私が今まで訪れたことのない北ウェールズの Conwy や南イングランドの Lewes を運よく見学することができた。どちらも城で有名であり、英国史と深いかわりのあるコンウィ城とルーイス城を見学できたことは私にとって大きな収穫であった。今回のイギリス訪問においても様々な発見があった。

もし私が誰かに「なぜイギリスに行くのですか」と問われたら、日常の喧騒から離れ気分を一新し、イギリスの今がどのようなになっているのかを実際に肌で感じるためであると答えるであろう。教師は学生に対して常に教える立場であるので、様々な新しい生の情報や研究に役立つ資料収集をすることによって、学生に還元することも英語教師の責務であると強く感じている。年齢を重ねるにつれて、帰国後時差ぼけが何日も続いたりして少し困ることもあるが、生きていることのすばらしさを実感したり、家族や日本のことを少しでも客観的に眺めることができたり、わずか数日間のイギリス滞在でも、緊張したり感激したりすることで、精神の浄化作用にもなっていると思う。

今回のイギリス訪問の目的は、英国史と深いかわりのある城を見学し、イギリス文学作品の舞台となった場所を訪れるためと Roald Dahl (1916-1990) の文学作品に登場する「ミルデンホルの宝物」を大英博物館で撮影し、彼に関する書籍や資料を古書店などから収集することであった。

南イングランドに関する書籍の中では、私は出口保夫著『南イングランドを歩く』(中央公論社)や Sir Hugh Cortazzi 著 *Thoughts from a Sussex Garden* (英潮社新社) が好きで、のんびりと訪れたいものであると前から思っていた。多くの観光客は南イングランドといえば、必ず Brighton に行き、ブライトンの棧橋周辺を散策しそこで食事などをすると思われる。Graham Greene (1904-91) の小説に *Brighton Rock* (『不良少年』) というのがあるが、この rock という意味はブライトン名物の餡のことである。ブライトンは何度も訪ねているが、今回は棧橋周辺は素通りし、The Royal Pavilion の内部をじっくりと見学した。ジョージ4世のベッドやヴィクトリア女王の間や Thomas Hope (1769-1831) 製のマホガニーの

家具などを直に見学することができた。ダールの短編小説に‘Parson’s Pleasure’（「牧師の楽しみ」）という作品があるが、そこに登場するのは Thomas Chippendale（1718-79）製のマホガニーの家具である。イギリスにおいて、絵画（風景画や肖像画）や建築物（城や教会や大聖堂など）や有名な家具師によって製作された高級な家具などを直に見ることはとても大切



The Royal Pavilion

なことであり、文学作品を読むときの肥やしになっているのである。私が驚いたのは、この屋敷の中に広い台所があり、王様に献上するための食材（肉や野菜や果物など）がずらりと皿の上に置かれていたが、その中に大きな剥製の白鳥が一羽載せられていたことであった。平和の象徴として崇められている白鳥も、当時は無残にも食卓に載せられていたのであった。

ダールの短編小説に、‘The Swan’（「白鳥」）という作品があるが、この中では白鳥は、暴力に毅然と対峙する平和の象徴として描かれていた。

南イングランドで、次に大切な場所はやはり Dover であろう。グレートブリテン島またはイングランドの古い名称として、イギリスは Albion といわれているが語源的に「白」を意味している。フランスなどから船でイギリスのドーバーの崖を水夫が見たときに、白亜の崖と感じたのであろう。私は白亜の The Seven Sisters は遠くから眺めていただけであったが、今回はその場所まで行き、チョークでできた岩が侵食され、チョークが海に溶け出して、長い海岸線に沿って海水が白くどんよりと濁っているのを目の当たりにした。とても心に残る印象的なシーンであった。この辺は湿潤な地層から成り立っていることに改めて気づかされた。



The Seven Sisters

それから今回の訪問で目を開かされたものにルイス訪問がある。イギリス人好みの落ち着いた古代アングロサクソンの歴史ある美しい町である。時間の都合で、ルイス城見学と古書店巡りしかできなかったが、何度も再訪したい場所である。英国史と深いかわりのある町で、1066年の Norman Conquest で有名な Hastings も近くにある。英文学を専攻して英語史を学んでいる学生ならば誰でも1066年という年号を覚え、ヘイスティングズという場所で、フランスのノルマンディーから侵入してきた William Duke of Normandy（1027-87）

(別名 William the Conqueror) (ウィリアム征服王) によって、アングロサクソンの王 Harold Godwinson II (ハロルド二世) が Senlac Hill で戦いに敗れ、それから約300年間に亘り、本来語 (アングロサクソン語) にとって代わり、ノルマン系の外来語が英語の中に大量に入ってきたという史実は知識として知っているはずである。しかし実際に Sussex に行かなければ、Weald や Downs というものがどんなものであり、ルイスの近くを流れている Ouse 川がどのような地形になっているのかなどを知らなければ、どのような方法で敵が川を上りながら攻めてきたのかなど到底理解できないと思う。ウィリアム1世がヘイスティングズの戦いの後、どのように統治していったのかを示す証拠が他ならぬルイス城である。この城は大部分破壊されているが、8つの高い塔と石壁が残っていた。古代アングロサクソンの町であったルイスを征服したノルマンの侵略者たちが、自分たちの力を強固にし、城 (木造の砦) を築いたのであった。1264年に The Battle of Lewes があったことも英語研究者は知っておいたほうが良いと思う。またこの町の High Street 沿いに4軒の古書店があり、そのひとつの書店で Faith Jaques (1923-1997) によるさしえのダールの *Charlie and the Chocolate Factory* (『チョコレート工場の秘密』) と Ian Fleming (1908-64) の *Chitty-Chitty-Bang-Bang* (『チキチキバンバン』) を購入した。この有名な『チキチキバンバン』の映画の脚本を書いたのが他ならぬダールであった。さらにダールの *Matilda* (『マチルダ』) (Quentin Blake (1932-) のサインが入った本) も一緒に売られていたが、135ポンドの値がついていたので購入しなかった。今や Quentin Blake は飛ぶ鳥をも落とす勢いで、イギリスにおいて精力的に多方面で活躍している。自らも多くの児童書を執筆し、さしえも描いている。Charles Dickens (1812-70) の *A Christmas Carol* (『クリスマスキャロル』) のさしえも描き、すでに出版されている。さらに、今年のBBCの対談番組で、Beatrix Potter (1866-1943) のピーター・ラビットの一連の本のさしえも Quentin Blake が今後担当すると伝えていた。また、ダールの児童文学書の中で必ず古典として残ると思われる作品に *The Minpins* (『ふしぎの森のミンピン』) というのがある。この作品はダールがさしえを Patrick Benson (1956-) にわざわざ懇願したものである。それゆえ、静謐な凛としたタッチのさしえに仕上がっていてとても文章と合致している。しかし、この作品が2017年に *Billy and the Minpins* という題に変更され、さしえが Quentin Blake によって描かれていた。私の好みからすれば、Patrick Benson のさしえのほうが文としくりなじんでいるような気がする。



ルイス城からの遠景

それから、次に Cotswolds 地方を訪れた。何度訪問しても落ち着く風景が待っていてく

れる。この地方は以前は羊毛の生産地として有名であった。今では蜂蜜が有名で観光地として世界中の人々が訪れている。特に Bibury は、蜂蜜色の小さな家々が点在し、美しい村の代表として観光客のメッカになっている。詩人で工芸家の William Morris (1834-96) が、「イングランドで一番美しい村」と絶賛したのもわかる気がするが、家の老朽化対策や冬場の気候を想像すると生活しづらいのではと思った。また、Bourton-on-the-Water は、「リトル・ヴェニス」という愛称で親しまれている村で、小川が流れアーチ状の石橋が架かり、印象派絵画のような風景であった。小さな子供がひざまでの水位の浅い小川に入り、楽しく歓声をあげて遊んでいたのが印象的であった。

その後、Gloucester に行った。前々から、この地を訪れたいと思っていた

場所でやっと夢が叶った気分であった。Beatrix Potter が Frederick Warne 社から、一連のピーター・ラビットの本を書いているが、その中の 1 冊に *The Tailor of Gloucester* (『グロスターの仕立て屋』) という本があったからである。グロスター大聖堂の入り口のところに、Shop and Beatrix Potter と書かれた小さな土産物屋があり、2階が簡単な展示室になっていた。この大聖堂はハリー・ポッターの映画「賢者の石」の舞台にもなっている。特に回廊が釣天井式に

なっていてとても美しかった。大聖堂を出て少しその付近を散策していると、大聖堂からすぐ近くのバス停のところに、Dick Whittington's という名前のパブが



Bourton-on-the-Water の美しい景色



グロスター大聖堂



Dick Whittington's という名のパブ



Dick Whittington と猫が描かれた看板

あり、看板に Dick と猫の絵が大きく描かれていた。William Jacobs 著 *English Fairy Tales* (『イギリス童謡集』) では、ロンドンの Bow 教会のお告げどおり、Dick は見事ロンドン市長になる。ここでは Dick Whittington が、グロスター大聖堂の鐘を聞くという設定なのであろう。パブの看板ひとつにもうまくひねりが利いている。

一方、ダールは、*Rhyme Stew* (『まぜこぜシチュー』) という本の中で、'Dick Whittington and His Cat' というこの作品の parody 版を書いていて、Dick も Bow 教会のお告げを聞きロンドンに戻るのだが、現実〔世間〕はそんなに甘くないぞという落ちで終わっている。もちろんダール版では、ロンドン市長に Dick はなれず、'Well well, that's how the cookie crumbles.' (「世の中 (人生) とはそんなもんだ」) というあきらめの捨てぜりふで終わっている。パブの看板に Dick Whittington と猫が描かれていたのには驚いた。イギリスの子供は多分 *English Fairy Tales* を読んでいるので、察しがつくのであろう。彼は実在の人物で、『ランダムハウス英和大辞典』第2版には、(1358-1423) と書かれ、「英国の商人；3度ロンドン市長になる」と記されていた。

そこから、約60キロほど離れた William Shakespeare (1564-1616) の生誕地である Stratford-upon-Avon に行った。街中をぐるりと散策し、シェイクスピアの家を写真に撮り、彼を埋葬している Holy Trinity Church の内陣を写真に収めた。彼の墓の隣には、妻であった Anne や彼の親族が眠っていた。

その後、Royal Shakespeare Theatre に立ち寄り、今年の3月から9月まで、RSC (Royal Shakespeare Company) がどんな演目を上演しているのかを調べてみた。Macbeth, Romeo and Juliet, King Lear, The Merry Wives of Windsor が上演されていた。特に今年の上半期は Macbeth の上演が群を抜いて多かった。英語の本場では、シェイクスピアの上演は欠かせないもので、日本の英語教育ももっと英文学の古典となっているようなものを、大学生にじっくり学ばせるという方策をしないと、文学離れが加速して手遅れになってしまうような気がしてならない。

その後、40キロほど離れた Birmingham へ行った。バーミンガムに行きたかった理由のひとつは、チョコレートで有名な Cadbury の工場見学をしたかったからである。この Cadbury World 見学は事前の申し込みが必要であった。入場料は、大人が17ポンドで子供(4-15歳)が12.5ポンド、4歳以下は無料と記されていた。私は事前に予約をしていなかったため今回は訪問できなかったが、バーミンガムから列車で15分くらいのところで、Bournville の駅で下車すればすぐだと教えてもらった。バーミンガムの *Time Out Kids* の



Holy Trinity Church の内陣にある
シェイクスピアの墓

4-5 ページに「10 delicious things about Cadbury World」という記事があって以下のよう
に始まっていた。

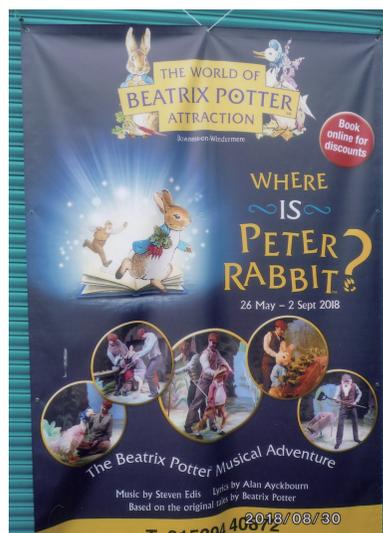
Ever dreamed of visiting Willy Wonka's factory?
Cadbury World in Birmingham is the next best thing!
A chocolate lover's paradise celebrating the iconic British brand,
it's a scrumptious day out with the kids and you don't need a
golden ticket to get inside.
Here are just some of our favourite reasons to go.

ダールの『チョコレート工場の秘密』を読んだ人ならすぐお分かりであろうが、Charlie Bucket のように工場見学する際に Willy Wonka が世界でたった5枚しか発券しなかった金券はいらないのである。

この工場見学は次回のお楽しみということにして、次の目的地に向かった。

バーミンガムから車で約250キロのところにある湖水地方 (Lake District) に向かった。今回の旅で非常に衝撃を受けた経験をした。湖水地方も数回訪れているが、Windermere 湖のクルーズの途中におこった。Lakeside までの約50分間の遊覧であったが、湖面すれすれにイギリス空軍 (RAF) の練習機がものすごいビューという轟音を立てて、我々のボート (遊覧船) すれすれのところをかすめて飛んでいったことである。一瞬何が起こったのか理解できないほど、私にとっては衝撃であった。ボートに乗り合わせていた地元の中年の女性に尋ねたら、笑顔でこの約1時間の間に2回ほどイギリス空軍が低空飛行などをするのだと教えてくれた。実際に遊覧中に2回我々のボートの側を練習機が横切った。Lakeside に到着し少し散策していたら、ブルーン・ブルーンという音を立て、空軍のヘリコプターが一直線に飛んでいた。この地形は谷になっていて、空軍が練習機を飛ばし飛行訓練をしていることが理解できた。いくら何度も現地に出向いていても、そのような経験に会うか会わないかによって理解が異なるものである。その意味では勉強になったが、遊覧をのんびり楽しむという気分はそがれてしまった。

またこの Bowness-on-Windermere にある The World of Beatrix Potter Attraction を訪れた。観光客なら何度も足を運び見学し、お気に入りの土産を購入する有名なところである。偶然にそこで The Peter Rabbit Theatre Show を5月26日から9月2日まで、



The World of Beatrix Potter Attraction

「Where is Peter Rabbit?」という題のミュージカルを上演していた。*The Times*はこのミュージカルに review (演劇批評) で、theatrical magic と激賞し 4 つ星を与えていた。またそこで、上演した CD 「Where is Peter Rabbit?」を、8.99ポンドで販売していた。23曲入っていて、歌もすばらしかった。

ピーター・ラビットの原文をじっくり味わうことも大切であるが、その原文を adapt した劇やミュージカルなどを観劇することも別の意味での勉強であるような気がする。生活の一部として文学作品を楽しむという発想を日本人英語学習者も肝に銘じておいたほうがよいと思われる。

最後にロンドン市内観光をした。Westminster Abbey, Buckingham Palace, British Museum などを訪れた。バッキンガム宮殿の内部を見学した後、敷地内の土産物売り場でボールペンや小間物や hot chocolate (ココア) を購入した。ココアを購入した理由は、イギリスの随筆などを読んでいて、しばしば hot chocolate という単語が出てくるからである。またその金色の缶に、エリザベス女王が好きな言葉である「Keep Calm and Carry On.」が印字されていたからである。飲んだ後でも筆立てとして活用できそうな品であった。

大英博物館を訪れた理由はここに「ミルデンホルの宝物」が陳列されているからである。最初に 5 年前に初めて目にしたときの感想は、銀器の発する鮮やかな光に感動を覚えたことである。

ダールの著書に *The Mildenhall Treasure* (『ミルデンホルの宝物』) という作品がある。Wales 生まれの Ralph Steadman (1936-) のさしえがついた立派な本である。サフォーク州の農民であるゴードン・ブッチャーという男が耕作中に、すばらしく美しいローマ時代の価値ある銀器を発見したが、あまりに正直すぎて巨額の報奨金をもらえなかったという内容である。これは、実話でダールは直接発見者取材し、これを創作作品にした。この作品では雇い主のフォードが貪欲で、耕作者のゴードン・ブッチャーは正直である。2人が対比され、人間の貪欲さと純真さを露骨に描いている。

ダールの短編はしばしば批評家からは macabre (ぞっとする) という評価を受けることがあるが、「The Surgeon」(「外科医」) という短編では、心優しい正直者が描かれていて happy ending で終わっている。どちらの作品(『ミルデンホルの宝物』も「外科医」も、ダールの作品では珍しく、読後感がすがすがしい作品である。

私はダールの本音(メッセージ)は、人間において大切な資質は、ゴードン・ブッチャーや外科医やその妻に備わっているような、人に対する優しさや正直さであると力説しているように感じられる。

大英博物館には、銀製の皿、小皿、ボール、柄のついたひしゃく、大盃、ワイン用の盃、スプーンなどがガラスのケースの中に収められ、まばゆいほどの光を放っていた。それを見た後1階の売店で、ミルデンホルの宝物について解説している書籍を1冊購入した。

日本に帰国前の午後は West End の Cambridge Theatre に行き、matinee (午後2時半

から5時10分まで)で、ダールのミュージカル「Matilda」を観劇した。5年前にもこの劇場で鑑賞したが、一番後の席で見たのでとても見辛かった。今回は2階正面前方の席であったので、十分ミュージカルを堪能できた。今回の上演で気づいたことは、マチルダの父親役の俳優がとても良い味を出していたことである。原文では女性として描かれているトランチブル校長役の俳優は相変わらず、すばらしい演技をしていた。『マチルダ』の原文では全くさえないマチルダの父親であるが、この上演ではひときわ観客を魅了していたのには大変驚いた。マチルダの5歳年上のマイケルの役は子供が演じていたが、ダールの原文と同じくこの上演でも全く出番がなくてかわいそうに思っ



Cambridge Theatre で上演中の「Matilda」

た。マチネ(昼興行)でも劇場は、ほぼ満席であった。大部分の客が家族と一緒に観劇に来ていた。ここが日本の観客層と違うところである。なぜ何度も上演を見るかという理由は、マチルダ役をする子役も3-4名いて、曜日によって代わるからである。どの子役がマチルダを演じるかによって、目の肥えた観客の入りも大きく異なるのである。

予定していたダールの故郷である Great Missenden に行くつもりであったが、今年の6月に flood (洪水) があり、The Twits という食堂と売店は一般に開放しているということであったが、博物館は9月時点では入館できないということであった。

私は来年で65歳となり、平成31年3月31日付けで定年退職を迎えるわけであるが、まだまだイギリスに出向き、ダールに関する調査や資料収集を継続していかなければならないと強く感じている。ダールが死後1991年に *My Year* (『一年中わくわくしてた』) という随想集を出版しているが、動植物や鳥や木々やきのこなどの自然が人間に大切なものであり、一瞬一瞬を真剣に生きてきたダールだからこそ書けた文章だなという思いが強くなった。ダールはわずか74年の生涯であったが、文章を書く時間を朝の9時半から12時、午後の4時から6時までと心に決め、庭の片隅にあった入り口の戸が黄色の hut (勉強部屋) に入り、カーテンを閉めて創作活動に打ち込んでいた。それ以外の時間は、自分の趣味(写真、ゴルフ、ワイン収集、絵画収集など)に没頭し、家族と一緒に過ごす時間も大切にしていた。現在、奥様の Felicity (愛称 Liccy) が母屋にいてダールの Gipsy House を継いでいる。地元の Great Missenden でも、ダールは非常に尊敬されている人物である。

今回の報告では、紙面の都合上、北ウェールズのコンウィ城について書くことは割愛し、England だけに限らせてもらった。イギリス文学作品の舞台となっている場所はイギリス各地にあるので、まずその場所へ一歩を踏み出すことである。

英語教師として大切なことは、まず英語が好きであること、次に感動する心をいつまでも

持ち続けることである。自己研修を自らに課し、イギリスの現地に行って異文化を身をもって体験することである。何度訪れても新鮮な発見があるはずである。できれば若いうちにしかも健康なときに外国に行くと、様々な場所をフィールドワークできて、収穫も大であると思う。

外国に留学した大学教師や或いは仕事で海外派遣になった会社員や外交官などの体験記を読むことも、イギリス文化を理解するひとつの勉強法であると考えている。外国に1年ないし数年滞在した人の体験記は、文章が軽やかで、すがすがしく感じられることがある。イギリスに限って言えば、私は以下の3冊を読者に推薦したいと思う。すでに品切れになっているかもしれないが、私はあえて古書店で、品切れや絶版になっている本を購入している。

英語研究者にとって必読書であった『英語青年』や『ELEC』も今では、紙媒体では読めなくなっている。大修館の『英語教育』だけしか、英語に興味を持っている読者は読めない状態である。私が若い頃6万円で購入した研究社の『福原麟太郎著作集 全12巻』や、講談社の『佐々木邦全集』やOxford University Pressの*The Oxford Illustrated Dickens* (『オックスフォード絵(さしえ)入りディケンズ集 全22巻』)も手元にある古書店のカタログでは、1万5千円の値しかついていない。現在、これらの本は、英語研究者や大学生に読まれていないのが実情であるかのように思われる。これが今日本の英語教師が置かれている現実である。好士の士に是非以下の著書を読んでいただきたい。

必ず、知的刺激を受け、わくわくするような感動を覚え、英語の音声の大切さに目覚め、今以上にやる気が出てくると思う。

大村善勇 (1993) 『街角のイギリス英語』 丸善

豊田昌倫 (1980) 『キングズ・イングリッシュへの旅』 サンケイ出版

吉川道夫 (1972) 『ことば・生活・辞書』 篠崎書林

